

第135号

ほほえみ

06 10.29 / 11.12

今、小児科医になる人が減っているそうです。日本小児科学会の調べで、今年の4月に小児科医師になった人は全国で502人。3～4年前の15%減、秋田、富山では1人もいなかったそうです。どうも、研修で小児科の仕事の厳しさを知って避けたようです。

<第137回 ほほえみの会 のぞみの会静岡支部会 共催>  
約40人が参加。三重大学付属病院小児科、堀浩樹医師の講演「小児がん経験者の長期フォローアップ」がありました。

小児がんの闘病は体の機能の発達途中での治療であり、化学療法や放射線により晩期障害の可能性がある。治療を終えて退院時には治療経過がわかる資料を医療側に依頼した方がよい。特に放射線治療を受けた場合にはどこにどの程度当たったのか治療内容がわかる資料が必要。晩期障害の知識を持って早期に対応してほしい。というお話しがありました。

こども病院では来春に産科の医師が着任することに伴い、フォローアップ外来を開設するとのこと。それ以前でも必要に応じて診て下さるとのことです。

<第138回 ほほえみの会>  
岡田医師をはじめ6人が参加しました。

小学6年男の子、悪性リンパ腫。サッカーや陸上が得意の元気な男の子で病院へかかったことがなかった。突然、嘔吐して市民病院へ。小腸が腫れてふさがっていることがわかりこども病院に転院をして手術したが、その手術で病気がわかる。本人も親もショック。特に本人はサッカーが得意で、推薦による中学の合格通知も受けていたので、6ヶ月の治療と聞いて泣き喚く。2週間たって親もようやく落ち着いてきた。医師もまたサッカーが出来るようになると言ってくれ本人も病気と闘う気持ちを持つようになった。3日前から化学治療を開始した。

5歳女の子、急性リンパ性白血病。治療を始めて9ヶ月、順調にきていたが、骨髄検査でがん細胞が見つかる。再発。ショック。化学治療の途中で再発したことから骨髄移植しかないといわれる。幸い、父親とHLAが一致した。普段は祖母が付き添ってしてくれる。父親はドナーとなる。母親は何をしてあげたらいいのか悩むことがある。たまにしか来れないが、精一杯の笑顔子どもに送って心の支えになってあげたい。

11歳男の子、慢性活動性EBウイルス感染症。骨髄移植に向けて5人のドナーが見つかって喜んでいたら、5人の検査が進まず、11月の移植予定が先送りされた。ショック。今は元気に学校にも通っているが、これから冬に向かって風邪でもひかないか心配。また、骨髄移植を前にして美味しいものを食べさせたり、行きたい所へは行かせるようにしている。経済的に大変。子どもの入院で心身ともに親が疲れてしまう。せっかく子供が外泊で帰ってきてても親が寝てしまい、子供が料理を作っていることもあった。

3歳男の子、急性リンパ性白血病。順調に治療が進み、1ヶ月半で寛解に入った。この間、笑顔が全くなっていたが、退院をしてようやく笑顔が出るようになった。



次回は 12月 10日(日) 11時からです

ほほえみの会 代表 池田恵一 TEL054-247-9560

E-mailアドレス k\_likeda@yahoo.co.jp

ホームページ <http://www.geocities.jp/hohoeminokai/>